一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報

向野遺跡 II

1991

大分県教育委員会

例　　言

1．本書は平成２年度に発掘調査を実施した、一般国道10号中津バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告である。

2．発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3．調査の組織は次のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会

調査委員　賀川　光夫(大分県文化財保護審議委員・別府大学教授)、小田富士雄(大分県保護審議委員・福岡大学教授)、後藤　宗俊(別府大学教授)、後藤　正二(大分県教育庁管理部参事兼文化課長)、林　英輝(同　課長補左)

調査主任　清水　宗昭(同　埋蔵文化財第１係長)

調 査 員　坂本　嘉弘(同　主査)、宮内　克己(同　主査)、西　哲弘(同　主任)、小林昭彦(同　主任)、原田　昭一(同　主事)、後藤　晃一(同　主事)、富田　修司(同　嘱託)、高松　永治(同　嘱託)、新宅　信久(同　嘱託)

4．本書の執筆、編集には後藤晃一があたった。

目　　次

Ⅰ　はじめに……1

1）調査の経過……1

2）平成２年度調査の概要……1

Ⅱ　発掘調査の概要……5

1）向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区……9

2）向野遺跡現道部分……16

Ⅲ　まとめ……24

表紙の写真は向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区検出の１号祭祀土坑

Ⅰ はじめに

1）調査の経過

昭和55年度から実施している一般国道10号中津バイパス建設に伴う発掘調査は、現道拡幅に伴う宇佐地区の向野遺跡の前年度未買収地を残すのみであった。今年度その買収も成立をみ、５月の終りより残る最後の一部分について調査を実施した。調査対象地は、前年度調査を実施した兵後畑地区Ⅰ区の西側隣接地で、大半の遺構について兵後畑地区Ⅰ区と連続性が想定されたため、新たな地区名は設定せず兵後畑地区Ⅱ区とした。調査は７月のおわりに終了した。

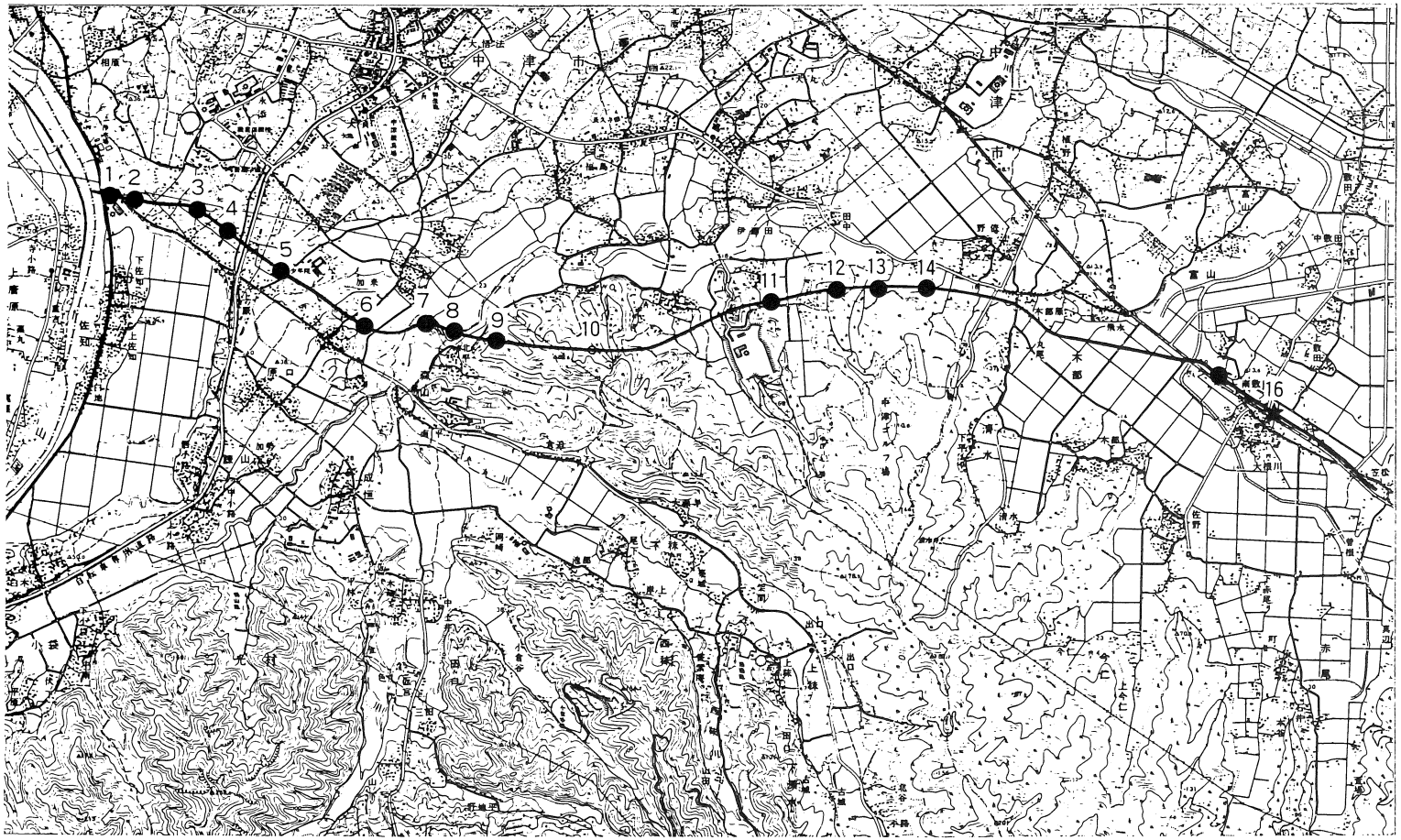
なお、今年度中津バイパス建設に付随して現道一車線分の土の入れ換え工事が行われることになり、発掘調査を実施することとなった。調査対象地は、今年度までの調査結果から遺構が濃密に分布すると想定される市場地区Ⅲ区から兵後畑地区Ⅱ区の間の隣接地に限った。調査は、11月のはじめより着手し、12月のおわりをもって終了した。これをもって一般国道10号中津バイパス建設に伴う発掘調査は総てを終了したこととなる。

2）平成２年度調査の概要

向野遺跡・現道部分の本調査を行った。向野遺跡は、五十石川低地と呼ばれる段丘上平野部に立地する遺跡で調査対象面積約13,000㎡に及ぶ。当遺跡は、大きく兵後畑地区・市場地区・ヲソヲ地区・檜極地区・川楽地区の五つに分かれる。今年度はこのうちの兵後畑地区について調査した。兵後畑地区については、前年度東半分（兵後畑地区Ⅰ区）を調査しており、今年度は残る西側半分（兵後畑地区Ⅱ区）を調査した。

兵後畑地区Ⅱ区では、溝８条、土坑９基、祭祀土坑３基、掘立柱建物３棟、土坑墓９基、ピット、弥生時代の遺物を含む落ち込み等を検出した。このうち溝４条は、兵後畑地区Ⅰ区で検出したものと連続するものであった。更に掘立柱建物についても兵後畑地区Ⅰ区のものとほぼ軸線の一致するものが認められており、これらの遺構は一連のものとしてとらえられる。兵後畑地区Ⅰ区では全く検出されなかった遺構で注目されるものとして弥生時代の遺構がある。土坑墓、祭祀土坑、落ち込み等が検出されており、このうち土坑墓については、列状配置が認められ注目される。また祭祀土坑については、位置関係から近接する土坑墓群に伴うものと考えられる。弥生時代の遺構は総て弥生時代中期に位置付けられる。

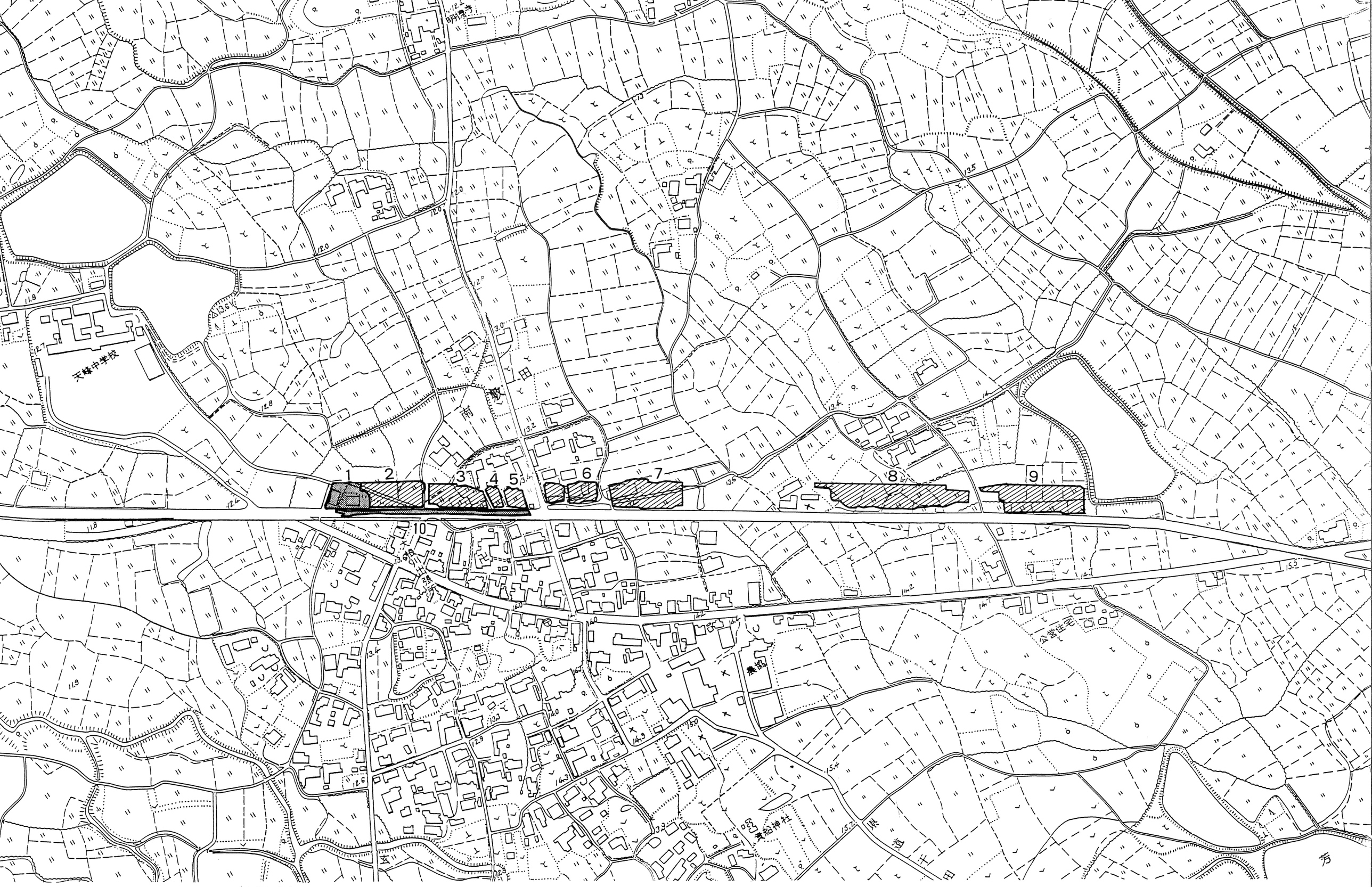
現道部分調査では、溝12条、掘立柱建物２棟、土坑11基、包含層等を検出した。このうち溝５条及び包含層に関しては、市場地区Ⅰ区・兵後畑地区Ⅰ区からの連続が確認された。特に溝１及び包含層からは８世紀～９世紀の遺物が豊富に出土しており、供膳具とされる盤、坏類が大半を占めていた。前年度でも触れた古代官道と溝との関連を考えるうえで重要な資料と言える。また、弥生時代後期の土坑が３基検出されたが、そのうち１基は甕を割って土坑を覆うように配置しており、土器蓋土坑墓の可能性が考えられる。しかし、土坑の規模が遺体を納めるにしては小さい点など問題点も多く、更に検討を要する。



1. 上ノ原横穴墓群
2. 勘助野地遺跡
3. 六畝町遺跡
4. 大池南遺跡
5. 清水郎原西遺跡
6. 黒水遺跡
7. 大坪遺跡
8. 樋多田遺跡
9. 森山遺跡
10. 寺迫遺跡
11. 草場窯業
12. 夜鳴池西窯跡
13. 踊ヶ迫窯跡
14. 瓦ヶ迫窯跡
15. 大根川遺跡
16. 向野遺跡

（本図は 国土地理院「土佐井」「宇佐」（２万５千分の１）地形図を使用した。）

第１図　平成２年度調査遺跡と周辺遺跡位置図



※ 斜線部分は昭和63年度、平成元年度調査地区
トーン部分は平成２年度調査地区

〔向野遺跡〕

1. 兵後畑Ⅱ区
2. 兵後畑Ⅰ区
3. 市場Ⅰ区
4. 市場Ⅱ区
5. 市場Ⅲ区
6. 市場Ⅳ区
7. ヲソヲ地区
8. 繪極地区
9. 川楽地区
10. 現道部分

第２図　向野遺跡（昭和63年度～平成２年度調査）と周辺地形図

※ 斜線部分は昭和63年度、平成元年度調査地区
トーン部分は平成２年度調査地区

〔向野遺跡〕

1. 兵後畑Ⅱ区
2. 兵後畑Ⅰ区
3. 市場Ⅰ区
4. 市場Ⅱ区
5. 市場Ⅲ区
6. 市場Ⅳ区
7. ヲソヲ地区
8. 繪極地区
9. 川楽地区
10. 現道部分

0

第２図　向野遺跡（昭和63年度～平成２年度調査）と周辺地形図

II 発掘調査の概要

向野遺跡兵後畑地区II区及び現道部分の調査を行った。向野遺跡兵後畑地区II区については、前年度兵後畑地区Ⅰ区で検出された遺構が連続していることが想定されたため、全面発掘を行った。また、現道部分については、前年度までの調査結果と今年度調査の兵後畑地区II区の遺構検出状況を踏まえ、遺構が濃密に分布していると想定される部分に限って調査した。遺跡の所在する地域は、両地区とも五十石川低地と呼ばれる段丘上平野部に位置する。

向野遺跡兵後畑地区II区（第４図）

当地区は、平成元年度に調査を行った兵後畑地区Ⅰ区の西側810㎡の範囲を示す。兵後畑地区Ⅰ区と関連する遺構として、溝、掘立柱建物等がある。特に溝に関しては、４条が兵後畑地区Ⅰ区のものと同一であった。また土坑墓群については、兵後畑地区Ⅰ区では検出されておらず、更に西側隣接地の大根川Ｄ地区、或は南側の現道部分でもみられないことから、北側に展開していく可能性がある。以下当地区で検出された遺構を列挙する。

溝（８条）……８世紀～９世紀４条（溝１・２・３・４）・時期不明４条

掘立柱建物（３棟）……時期不明

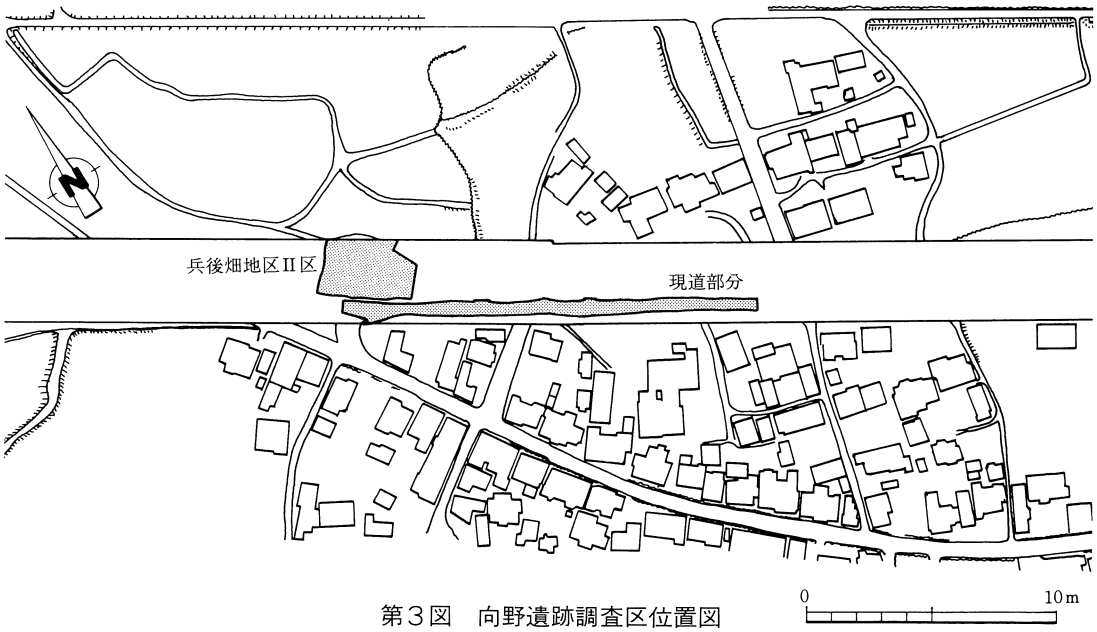
土坑（９基）……８世紀～９世紀１基（土坑５）・近世１基（土坑１）

祭祀土坑（３基）……弥生中期

土坑墓（９基）……弥生中期

落ち込み……弥生中期

井戸（１基）……近世



第３図　向野遺跡調査区位置図

向野遺跡現道部分（第４図）

調査を実施した地域は、向野遺跡の市場地区Ⅰ～Ⅲ区(昭和63年度調査)、兵後畑地区Ⅰ区(平成元年度調査)、兵後畑地区Ⅱ区(平成２年度調査)の南側に隣接する約1,200㎡の範囲である。現道一車線分のみが調査対象となったため、６ｍ幅の極めて限定された範囲内での遺構検証となった。しかし、現道部分で検出した遺構が、前述の調査区（市場地区Ⅰ～Ⅲ区、兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区）で検出された遺構と大半が連続しているため、これまでの調査結果をもとに遺構の性格を判断していくことができた。

溝(14条)……８世紀～９世紀３条(溝１・５・７)・中世１条(溝４)・近世６条(溝２・３・８・９・10・11)・時期不明４条

掘立柱建物(２棟)……時期不明

土坑(15基)……弥生後期３基(土坑３・４・10)・８世紀～９世紀５基(土坑１・２・５・７・９)・近世１基(土坑６)・時期不明７基

包含層……８世紀～９世紀

各遺構の相関関係（第４図）

今年度向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分で検出した遺構は、昭和63年度・平成元年度調査で検出した遺構と連続、或は関連するものが多く、ここで簡単に整理しておく。

向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区

溝……溝１－溝１(兵後畑地区１区)、溝２－溝２(兵後畑地区Ⅰ区)、溝３(兵後畑地区Ⅰ区)、溝４－溝4（兵後畑地区Ⅰ区）

掘立柱建物……建物１－建物２・３(兵後畑地区Ⅰ区)軸がほぼ一致

向野遺跡現道部分

溝……溝１・７－溝４(兵後畑地区Ⅰ区)、溝２－溝６(市場地区Ⅰ区)、溝５－溝２(兵後畑地区Ⅰ区)、溝８－溝９(兵後畑地区Ⅰ区)

掘立柱建物……建物１－建物２・３(兵後畑地区Ⅰ区)軸がほぼ一致

包含層……兵後畑地区Ⅰ区・市場地区Ⅰ区と連続

なお上記の溝に関しては、いずれも同一の溝であるため、名称の煩雑さによる混乱をなくすため下記のとおりに名称を改める。

１号溝……溝１(兵後畑地区Ⅰ区)、溝１(兵後畑地区Ⅱ区)、

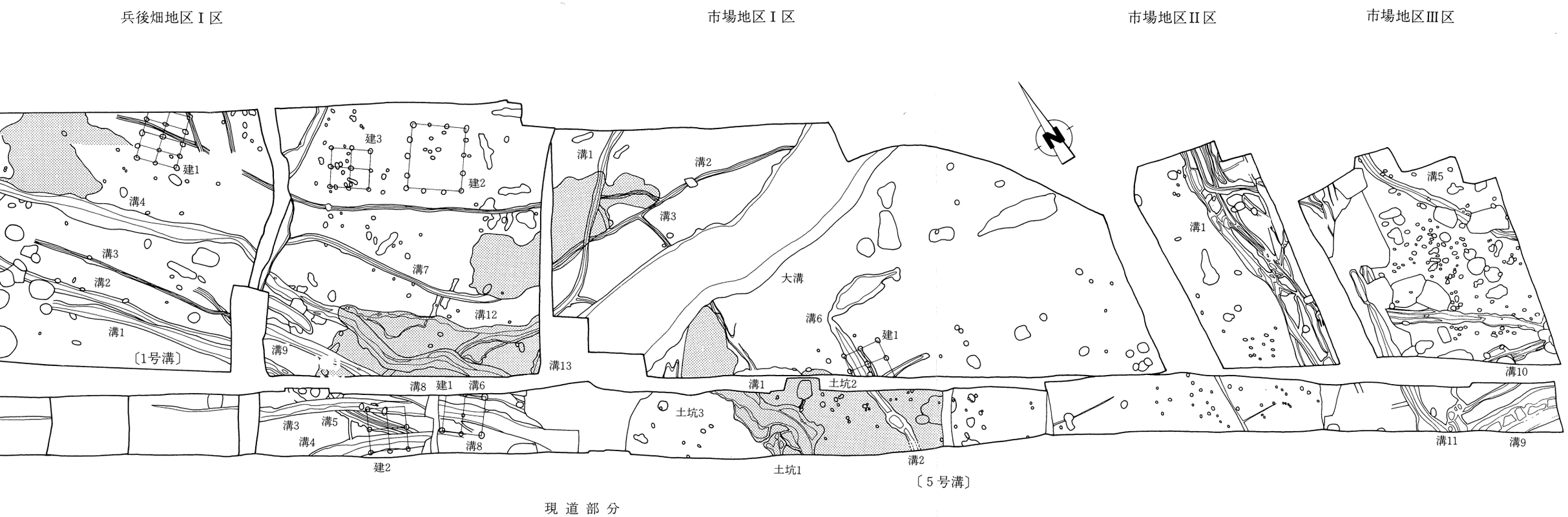
２号溝……溝２(兵後畑地区Ⅰ区)、溝２(兵後畑地区Ⅱ区)、溝５(現道部分)

３号溝……溝３(兵後畑地区Ⅰ区)、溝３(兵後畑地区Ⅱ区)

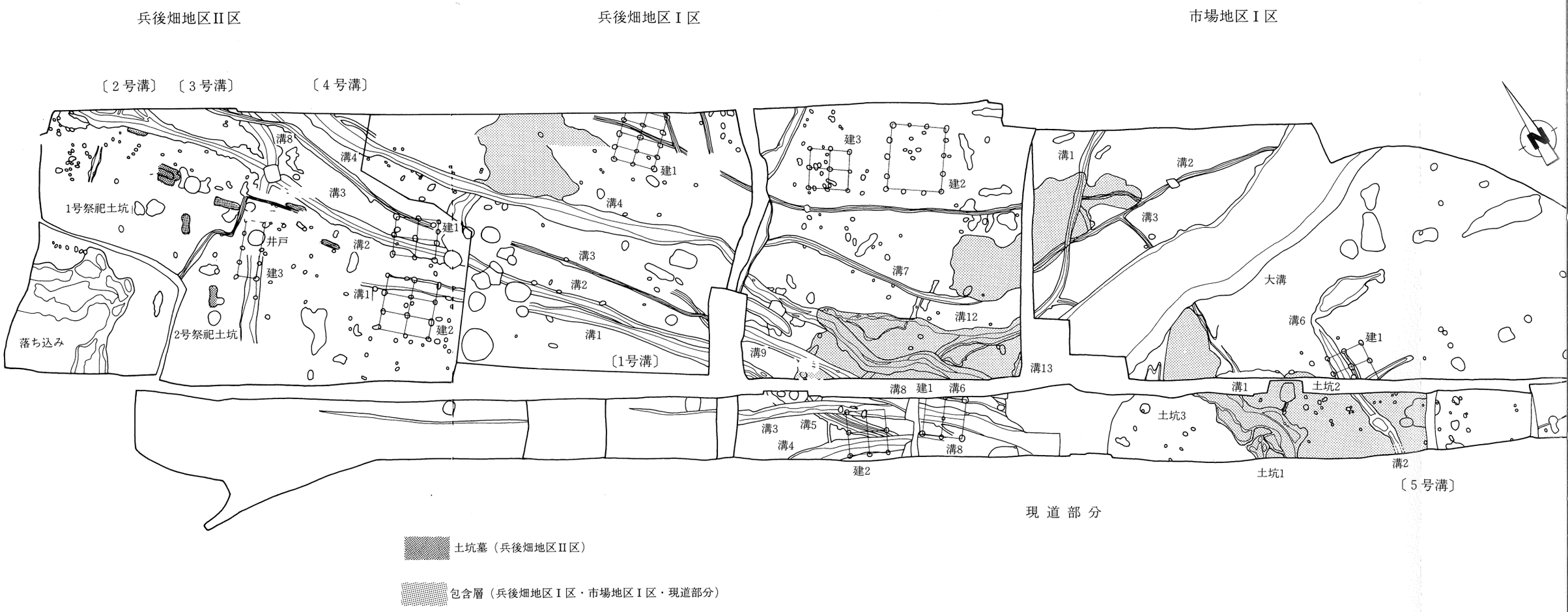
４号溝……溝４(兵後畑地区Ⅰ区)、溝４(兵後畑地区Ⅱ区)、溝１・７(現道部分)

５号溝……溝６(市場地区Ⅰ区)、溝２(現道部分)

６号溝……溝９(兵後畑地区Ⅰ区)、溝８(現道部分)



第４図　向野遺跡（兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区，市場地区Ⅰ～Ⅲ区，現道部分）遺構配置図



第４図　向野遺跡（兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区，市場地区Ⅰ～Ⅲ区，現道部分）遺構配置図

1）向野遺跡兵後畑地区II区（第５図）

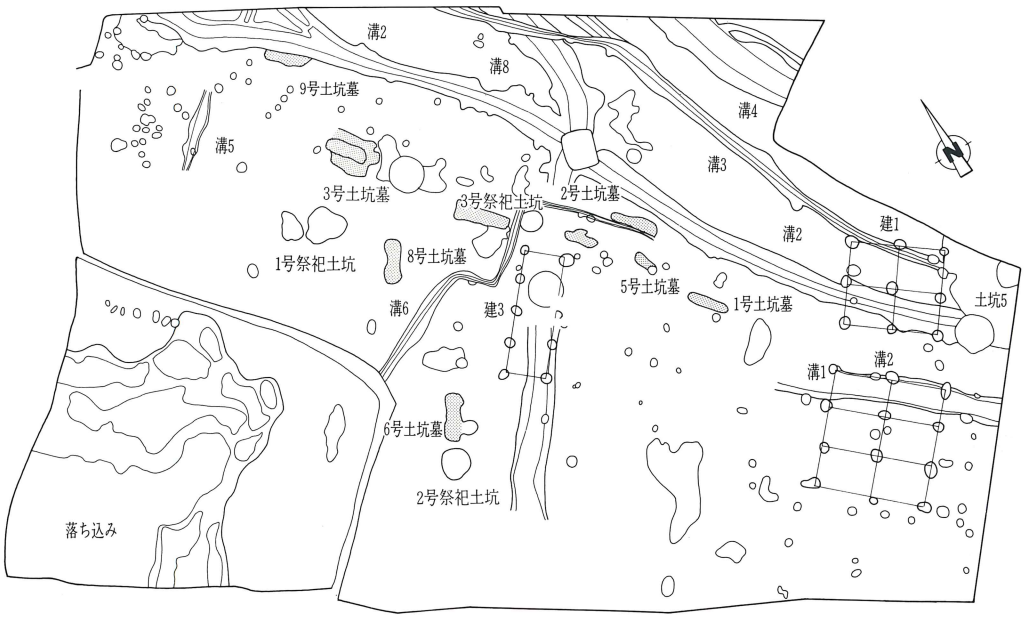
当地区は、南西に向かって緩やかに高くなる微高地縁辺に位置している。また、調査区南西隅の一角約150㎡は、水田形成に伴うと思われる掘削がなされている。検出した遺構は、溝８条、土坑９基、祭祀土坑３基、土坑墓９基、掘立柱建物３棟、井戸１基、落ち込み等であった。

溝　８条の溝のうち、時期を認定できたものは５条であった。

溝１は、確認長８ｍ、幅１ｍ、深さ0.2mであった。包含されていた遺物は、須恵器片、土師片等であるが、時期を明確にしうる遺物の出土は認められなかった。但し溝１は、東側の兵後畑地区Ｉ区で検出した溝１に連続するものであり、前年度調査の所見に基づき８世紀～９世紀に位置付ける。

溝２は、確認長35m、幅１ｍ、深さ0.5mであった。当溝は調査区東側中央から北西隅に向かって延び、調査区中央付近で溝８と交差する。両者の切り合い関係は、土層の観察の結果、溝２の方が古いことが確認された。溝２は、兵後畑地区Ｉ区の溝２、更には現道部分の溝５につながる。兵後畑地区Ｉ・II区の溝２からの遺物出土状況は希薄であったが、現道部分の調査の結果溝５が８世紀～９世紀に位置付けられたため、溝２もその時期に位置付ける。

溝３は、確認長17m、幅0.25m、深さ0.5mであった。当溝は溝２とほぼ平行して調査区東側から北西へ向けて延びる。出土遺物は僅少で、須恵器片、土師器片が数点出土したのみであった。当溝は、兵後畑地区Ｉ区の溝３に連続すると考えられるが、前年度調査でも遺物の出土は殆どみておらず、現段階では明確な時期は不明である。

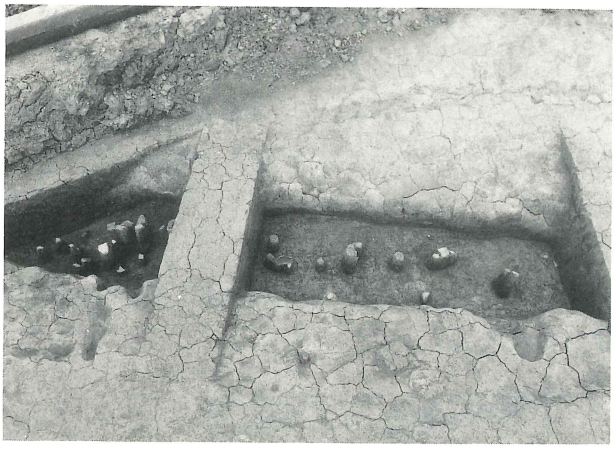


※ トーンをかけた部分は土坑墓

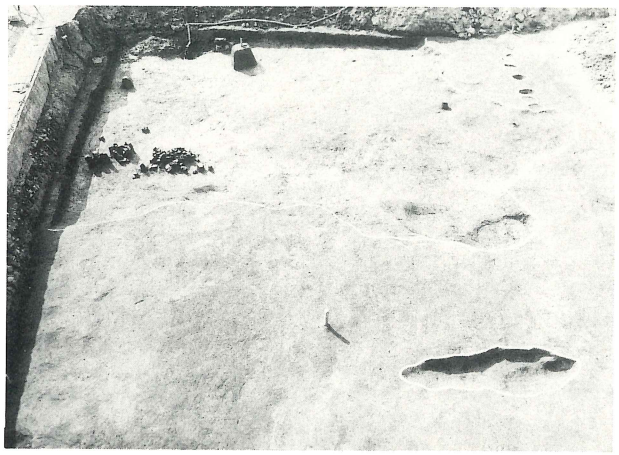
0　10m

第５図　兵後畑地区II区遺構分布図

全景（東方向より）



溝４（南方向より）



落ち込み（東方向より）

溝４は、確認長５ｍ、幅２ｍ、深さ0.6mであった。当溝もやはり調査区東側から北東方向へ向け溝３と平行して延びる。溝内からは８世紀～９世紀の須恵器、土師器が主体となって出土した。当溝は兵後畑地区Ｉ区で検出した溝４と連続しておりこの遺物の出土状況は、前年度の調査結果と符合する。

溝８は、調査区中央を南から北へ向かって延び、溝２を切った後溝３と平行して北西へ延びる。確認長は20m、幅1.5m、深さ0.1～0.2mであった。溝内からは、須恵器片、土師器片が若干出土しているのみで、明確な時期については現段階では不明である。

掘立柱建物

建物１は、２間(3.5m)×２間(3.5m)の総柱建物で、柱穴径0.5m、深さ0.4～0.8mであった。建物の方位については、兵後畑地区Ｉ区の建物２・３及び現道部分の建物１とほぼ一致しており、同一のグループとしてとらえられる。柱穴からの出土遺物は僅少で、当建物の明確な構築時期は不明である。但し当建物は、８世紀～９世紀に位置付けられる溝２を切って建てられており、上記の建物の一群はこの溝２、或は同時期と考えられる溝４とは、時期を隔てて機能していたことが想定される。

建物２は、２間(4.5m)×３間(5.0m)の総柱建物で柱穴径0.5m、深さ0.3～0.5mであった。柱穴から遺物の出土はやはり見られず、明確な時期は現段階では不明である。当建物は建物１の南側に隣接して建つが、方位が若干異なる。むしろ方位的には次に述べる建物３とほぼ一致する。建物１が兵後畑地区Ⅰ区及び現道部分で検出された建物と方位的に一致する事実等を考慮すれば、建物２・３は別の一群としてとらえる必要がある。

建物３については、１間(1.7m)×４間(4.0m)の部分が確認された。建物の東側はかなり撹乱されており、さらに東へ展開することも想定される。東へ展開して総柱建物または西側廂付きの建物になる可能性も考えられるが、現段階では１間×４間の建物としてとらえる。柱穴からは、やはり遺物の出土は認められなかった。

出土遺物（第６図）

１・２・５・６・８は溝４から出土、３・４・７・９は土坑５から出土した。

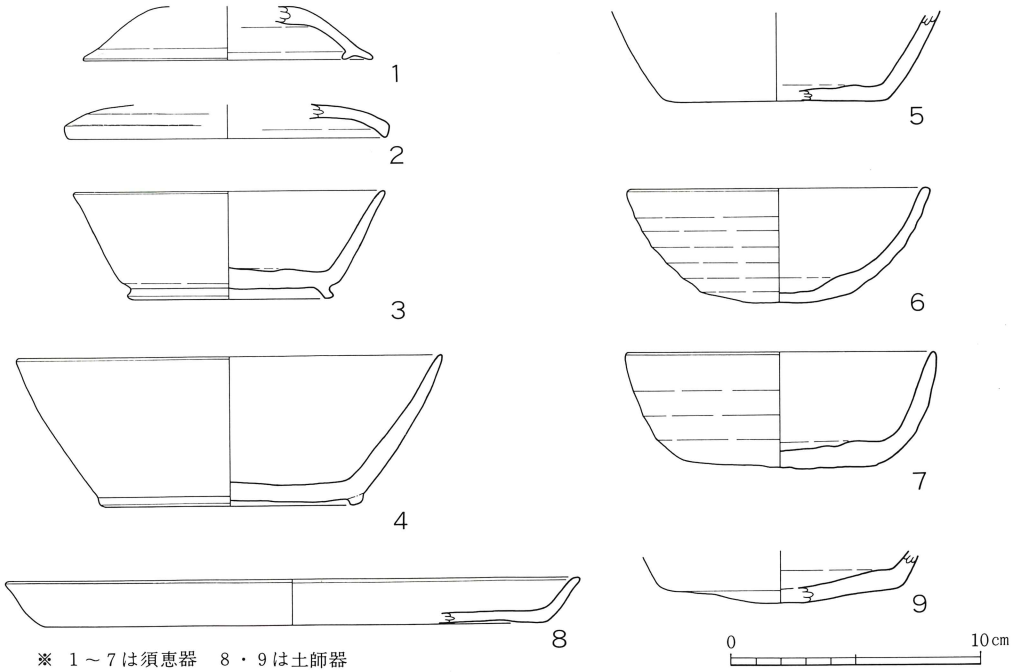
１・２　須恵器の蓋で、１は口縁部内側にかえりをもつ。

３・４　須恵器の椀で、３は口縁部が僅かに外反し、高台は外に張り出す。４は体部が口縁部に向かい内湾気味に伸び、高台は体部と底部の境に直立気味に付く。

５～７　須恵器の坏で、５は口縁部を欠損し、６・７は体部が口縁部に向け内湾気味に伸びる。

８　土師器の盤で、口縁部が僅かに外反する。

９　口縁部及び体部の大半を欠くため器形の詳細は不明だが、土師器の坏と考えられる。



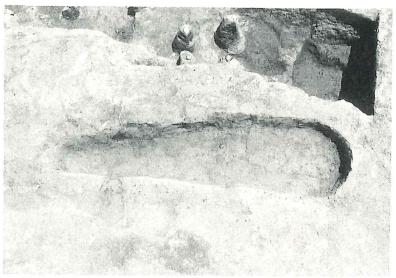
※　１～７は須恵器　８・９は土師器

第６図　兵後畑地区Ⅱ区出土遺物実測図

土坑墓

全部で９基の土坑墓を検出した。そのうちの７基（１～５・７・９号土坑墓）は、調査区中央を南東から北西へ向け、列状に配置されていた。また残る２基（６・８号土坑墓）は、他の７基の土坑墓とほぼ直交する形で検出された。こうした墳墓の配置については、地形による制約はまず考えられず、人為的なものであることは間違いない。

いずれの土坑墓からも、遺体の遺存は確認されず、更に副葬品等も検出されなかった。また、土坑の周囲に掘り込み（墓坑）[註1]を有す二段掘りの土坑墓は、３号土坑墓の１基のみで、他には検出されなかった。これに関しては、３号土坑墓に比べ他の土坑墓の深さが浅いことなどを考慮すると後世の削平による消失の可能性も考えられる。なお、各墳墓の頭位は明確なものが少なく、墳墓群の頭位の方向性については今後検討する必要がある。

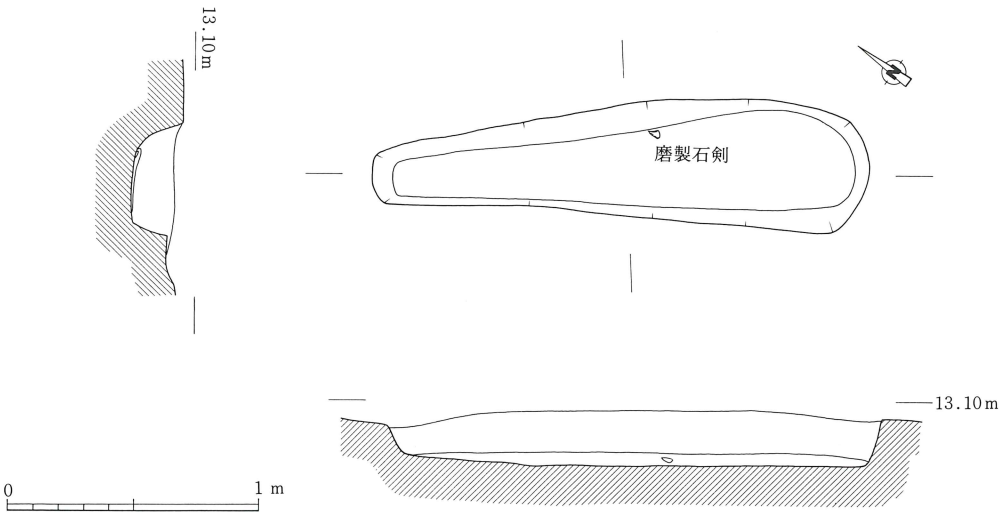


２号土坑墓（南方向より）

３号土坑墓（南方向より）

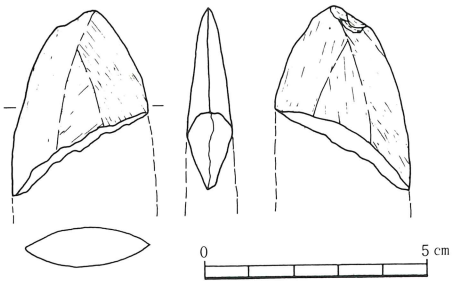
２号土坑墓（第７・８図）

長さ2.0m、幅短径で0.22m、長径で0.5m、深さ0.22mの規模を有する。平面プランは、南東側端部が広がり半円形状をなす。こうしたプランから南東側が頭位であることが推測される。



第７図　２号土坑墓実測図

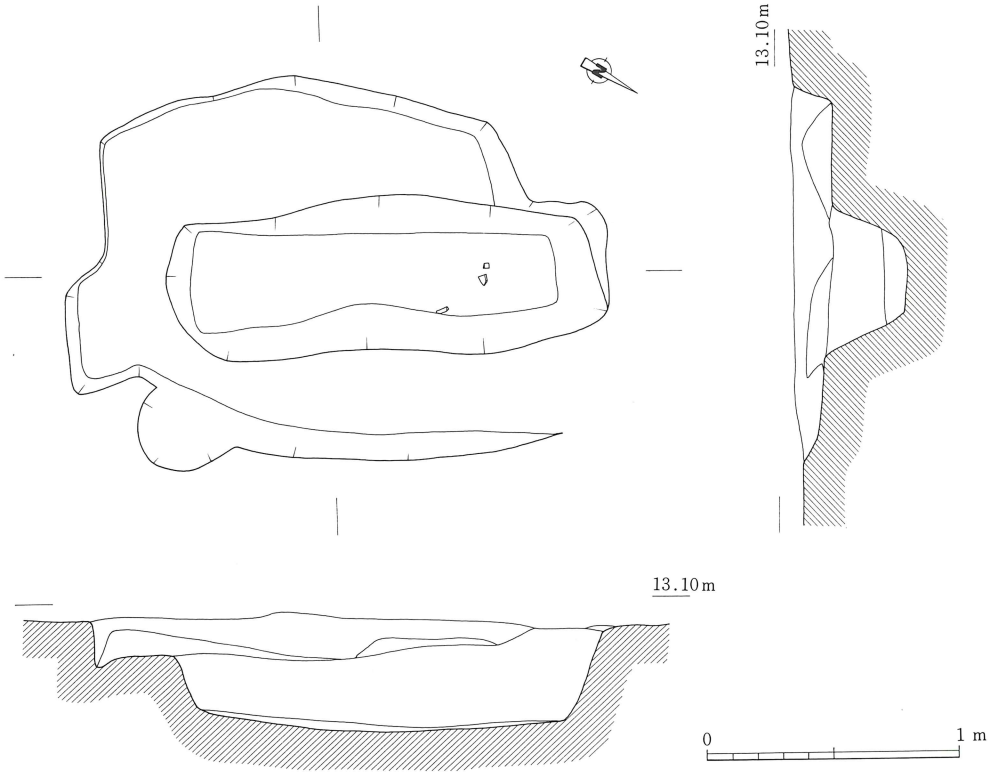
土坑墓内からは、磨製石剣の先端部が１点検出された。石剣の欠損状況から、堅い障害物に打撃が与えられた結果先端部が剝離し、更にその後加えられた圧力によって剣先が折れたものであることが確認された。また、この磨製石剣はちょうど先端部が土坑の内側を向いた状態で出土しており人体に刺突されたものであることが想定される。



第８図　磨製石剣実測図

３号土坑墓（第９図）

遺体を収めた土坑の規模は、長さ1.7m、幅0.6m、深さ0.3～0.4m、周囲を浅く掘り込んだ墓坑の規模は長さ1.7m、幅1.5m、深さ0.15mであった。平面プランは土坑、墓坑のいずれも長方形に近い形状をなす。当土坑墓は、蓋の施設をもっていたことが推測されるが、その材質が何であるのか現段階では不明である。なお、墓坑を有するものはこの３号土坑墓だけであり、規模も他に比べると大きい。また、１号祭祀土坑とも位置的に近接しており、今後被葬者の位置付けについて検討して行く必要がある。



第９図　３号土坑墓実測図

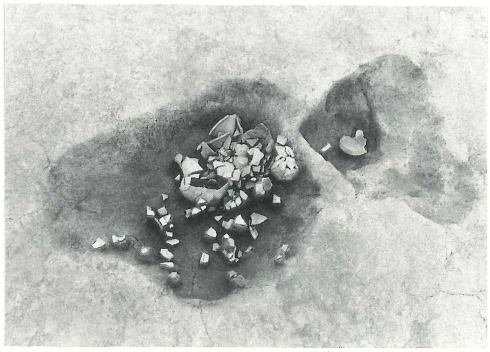
祭祀土坑

３基の祭祀土坑が検出された。各土坑の時期は、出土遺物よりいずれも弥生中期に位置付けられる。ここでは１号祭祀土坑について触れる。

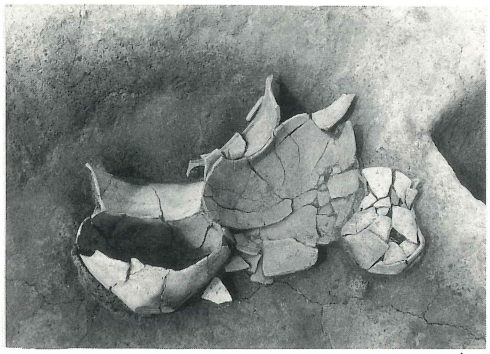
１号祭祀土坑（第10図）

２基の土坑が並列した状態で検出された。このうち西側の１基は、壁面がオーバーハングしており、更に出土遺物も希薄なことなどから東側の土坑とは、性格を異にすると考えられる。

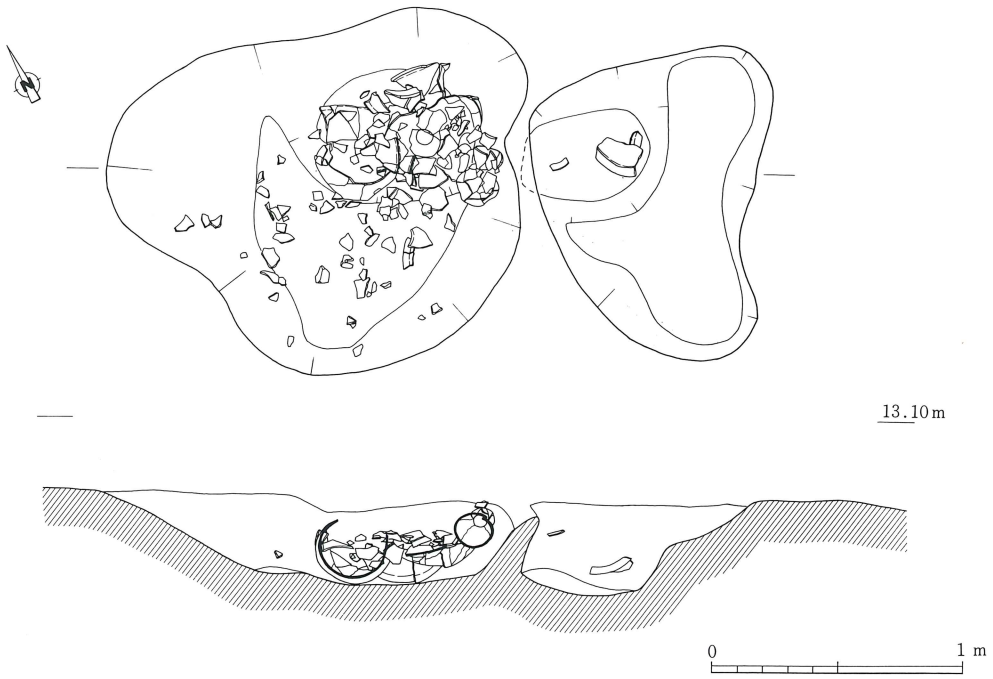
東側の土坑は、長径約1.6m、短径約1.3m、深さ約0.35mで歪んだ長楕円形のプランをなす。土坑内からは、多数の土器片とともに壺が３個体ほぼ完形に近い状況で出土した。壺はいずれも穿孔されていた。この１号祭祀土坑から出土した遺物は、その出土状況、或は近接する土坑墓群との位置関係などから、土坑墓群に伴う祭祀行為に関係したものと考えられる。



１号祭祀土坑遺物出土状況（北方向より）



１号祭祀土坑遺物出土状況（北方向より）



第10図　１号祭祀土坑実測図

落ち込み

調査区西側隅で、約80㎡にわたって落ち込み状の遺構が検出された。遺構内からは、弥生中期の土器片がまとまって出土した。当遺構は、他の遺構と比べ地形的に低いところに位置しており、土坑墓群、祭祀土坑に伴う遺物が流れ込んだものと想定される。

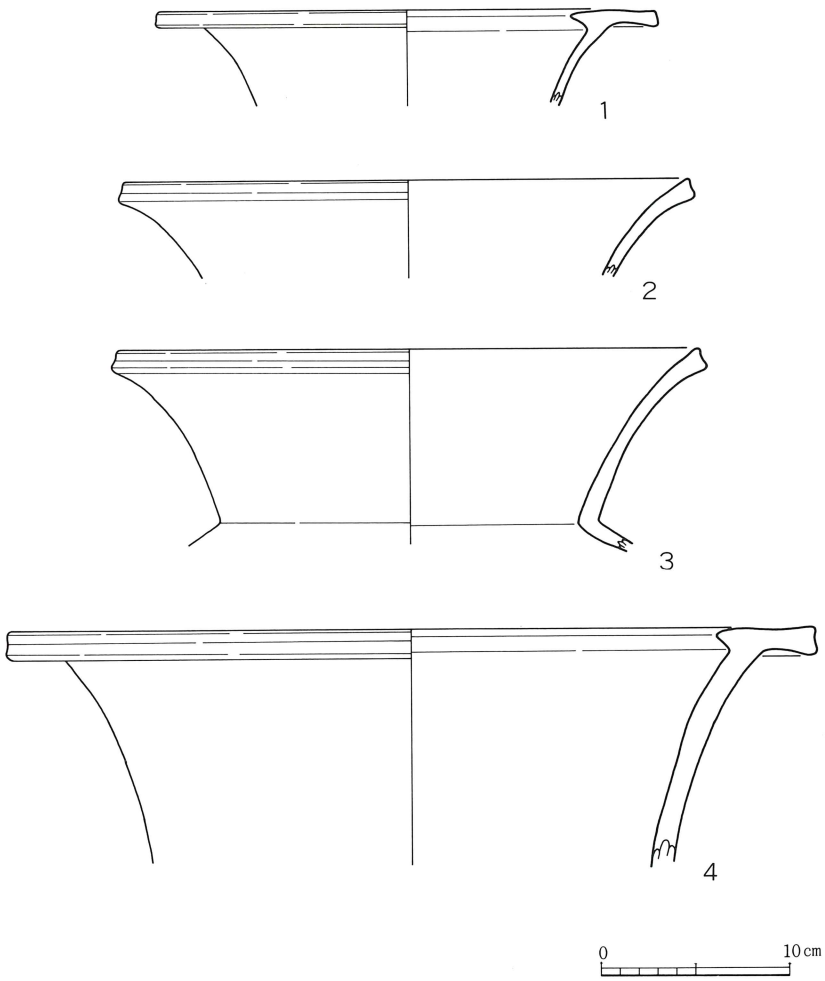
出土遺物（第11図）

1　鋤先口縁を呈する壺の口縁部で、復元口径は、26.6cmである。

2　跳ね上げ口縁を呈する広口壺の口縁部で、復元口径は、30cmである。

3　跳ね上げ口縁を呈する広口壺で、胴部を欠損する。復元口径は、31cmである。

4　鋤先口縁を呈する壺で頸部下半を欠損する。復元口径は、43cmである。



第11図　落ち込み内出土遺物実測図

2）向野遺跡現道部分（第12図）

調査対象地は、昭和63年度から今年度までの間に調査を実施した向野遺跡市場地区Ⅰ～Ⅲ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区の南側隣接地域である。調査範囲は現在の国道10号の一車線分で、幅４～６ｍ、距離にして162ｍ、面積は約890㎡に及ぶ。地形景観は、市場地区Ⅰ～Ⅲ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区とほぼ同様で、微高地をなしている。検出した遺構は、溝15条、土坑15基、掘立柱建物３棟、井戸１基、包含層、ピット群等であった。検出した遺構の中で、溝、掘立柱建物、包含層は、市場地区Ⅰ区及び兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区から連続するものが認められており、第４図を参照されたい。

溝　14条の溝のうち、時期を認定できたのは10条であった。

８世紀～９世紀―溝１・５・７

溝１は、確認長10ｍ、幅２ｍ、深さ0.6ｍの規模を有す。溝内からは８世紀～９世紀の須恵器、土師器を中心にかなりの量の遺物が出土した。溝１の規模、堆積状況、遺物の出土状況等は、溝７と似ており、更に兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝４とも近似する。従ってこれらの溝は総て連続する可能性が高い。この一連の溝は更に南方へ向け延びていくと考えられ、前年度の概報でも触れた推定古代官道に一層接近することになる。また溝内から出土した遺物については供膳具とされる盤、坏類の割合が高く、推定官道との関係を考えるうえで注目される。

溝５は、確認長14ｍ、幅１ｍ、深さ0.7ｍの規模を有し、兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝２と連続する。前年度の調査では、遺物の出土状況が希薄で時期が確定できなかったが、今回の調査で８世紀～９世紀の須恵器、土師器が出土したため、その時期に位置付ける。溝５は溝１とほぼ平行して更に南東方向へ延びると考えられ、溝１と併せて推定官道との関係を検討していく必要がある。

中世―溝４

溝４は、確認長16ｍ、幅1.7ｍ、深さ0.4ｍの規模を有す。溝内からは、中世の土器片がまとまって検出された。

近世―溝２・３・８・９・10・11

溝２は、確認長７ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.2ｍの規模を有し、市場地区Ⅰ区の溝６に連続する。溝内からは近世の遺物がまとまって出土した。なお溝２は、調査区中央付近で長径２ｍ、短径1.4ｍ、深さ0.6ｍの土坑状の掘り込みがあり、流水を一度溜める機能を有していたことが想定される。

溝８は、確認長13ｍ、幅1.4ｍ、深さ0.2ｍの規模を有し、兵後畑地区Ⅰ区で検出された溝９と連続する。前年度調査で確認された丸太が溝８でも検出され、やはり土留めの機能を果たしたものと想定される。

第12図　現道部分遺構分布図

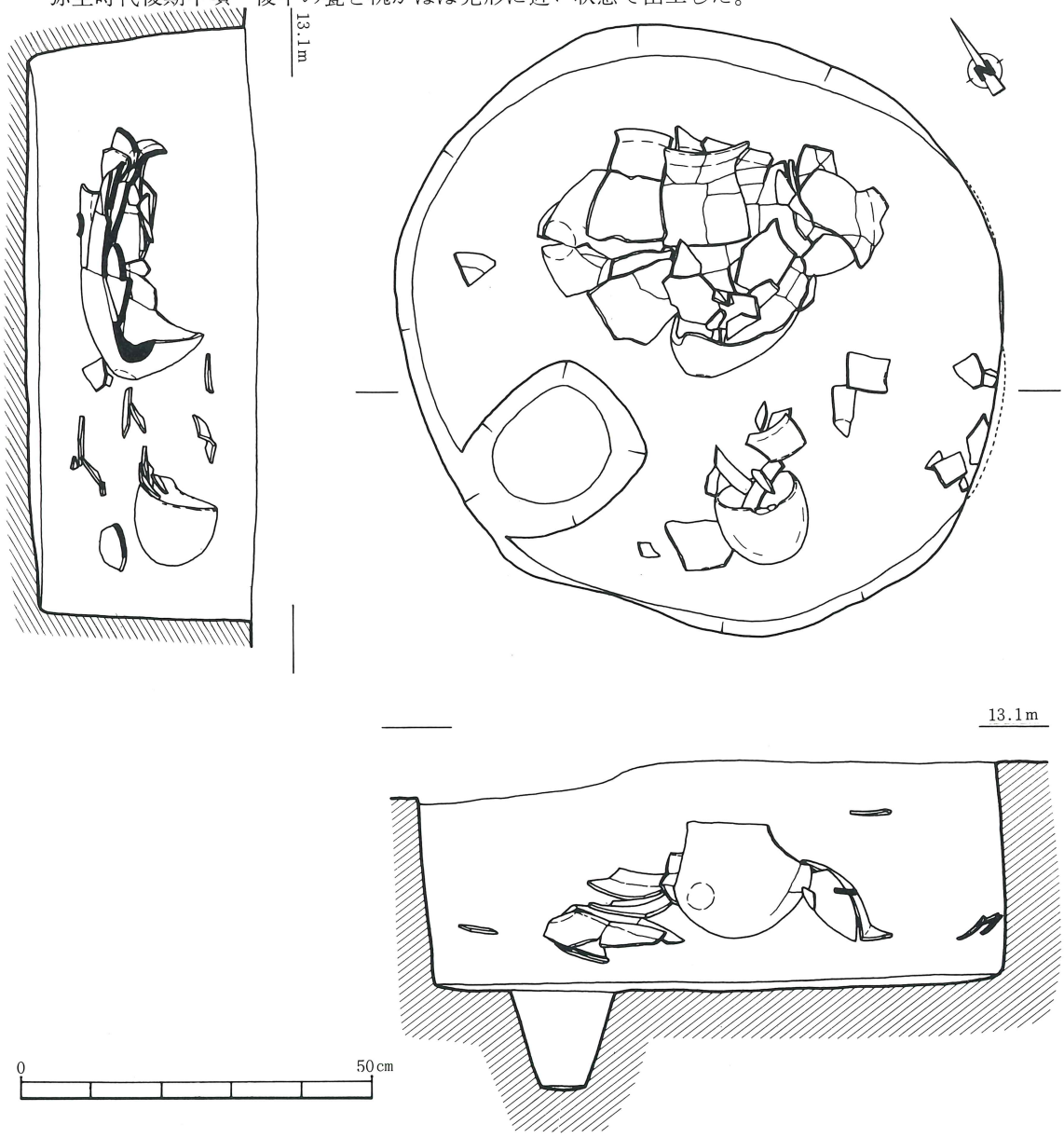
土坑　15基の土坑のうち、時期が認定できたのは９基であった。

弥生時代―土坑３・４・10

出土土器から、土坑３は弥生時代後期中頃～後半、土坑４は弥生時代後期に位置付けられる。また土坑10は、土坑４の西側に隣接して検出されたが、出土遺物は希薄で更に土坑の形態も土坑４とは若干異なるため、両者の関係については現段階では不明である。

土坑３（第13図）

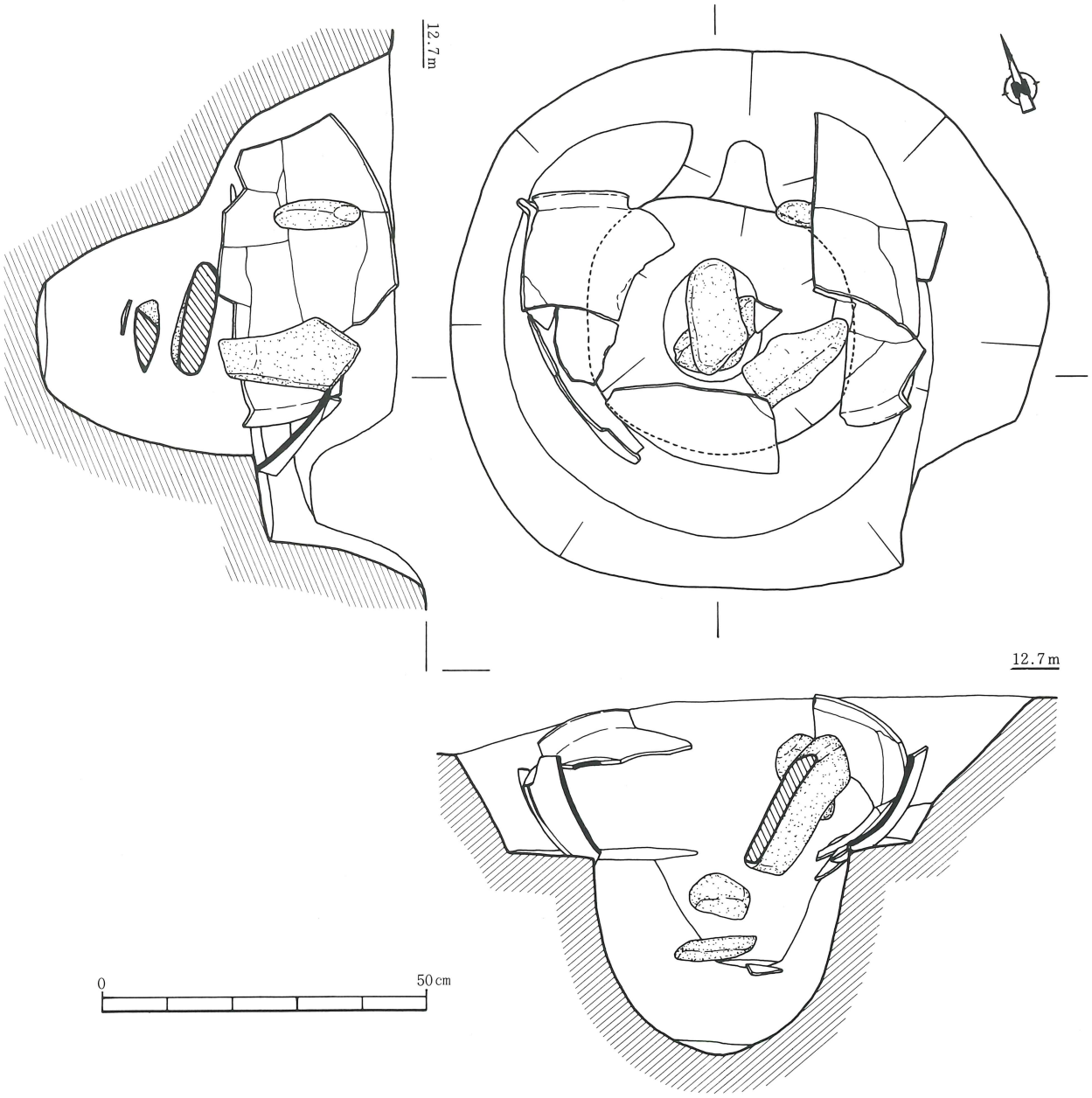
直径0.9mの円形プランで、深さは0.3mを有す。壁面は直立気味に立ち上がる。土坑内からは弥生時代後期中頃～後半の甕と椀がほぼ完形に近い状態で出土した。



第13図　土坑３実測図

土坑４（第14図）

直径0.9mのほぼ円形に近いプランで、深さは0.55mを有す。土坑内には更に直径0.4m、深さ0.3mの円形の掘り込みがあり二段掘りの状況を呈している。造り出された段上には、土坑を覆うようにして甕が割られて配置されており、土器蓋土坑墓の可能性も考えられる。しかし、仮に土坑内の掘り込みを墓坑とすると、規模が小さすぎる懸念があり、土坑の性格については今後検討を要する。



第14図　土坑４実測図

８世紀～９世紀―土坑１・２・５・７・９

土坑２は、長径1.7m、短径１ｍの隅丸長方形に近い平面プランで、一部南東隅で方形状に張り出す。深さは0.5mを有す。土坑内からは、８世紀～９世紀の須恵器片、土師器片が多量に出土した。特に方形状に張り出した部分からは床面直上で須恵器の蓋がほぼ完形の状態で検出されており、意図的に埋納した可能性もある。土坑の形態から墓であることも想定される。

中世―土坑11

土坑11は、大半が調査区を越えてしまうため遺構の詳細は不明であるが、直径１ｍ近くの円形プランをなす土坑であると考えられる。深さは0.5mを有し、土坑内からは中世の土器片が出土した。

掘立柱建物　建物１は、２間(3.5m)×2 間(3.5m)の総柱建物で、柱跡は３本確認された。建物２は、２間(3.3m)×２間(3.3m)のやはり総柱建物で、柱跡は５本確認された。掘立柱建物の方位については、建物２が兵後畑地区Ⅰ区の建物２・３とほぼ一致しており、同時期としての位置付けが可能である。

井戸　遺構の大半が調査区外に出るため明確な規模は不明である。遺構内からは、主に中世の土器片が出土した。

包含層　市場地区Ⅰ区の包含層につながる。８世紀～９世紀の須恵器、土師器を包含していた。出土土器の中では、特に供膳具とされる盤、坏類が目立ち注目される。なお包含層の堆積状況は、兵後畑地区Ⅰ区南東隅の溝４直上で検出された包含層と酷似する。出土土器の組成、時期等もほぼ一致しており、途中撹乱、地形等により消失しているものの、一連のものであることはまず間違いない。

出土遺物（第15図）

８世紀～９世紀の須恵器、土師器を包含層、溝１出土のものを中心に図示した。

1　須恵器の蓋で、口径15cmである。口縁端部で屈曲しくちばし状を呈す。

2　須恵器の蓋で、口縁部を欠くため口径は不明である。断面の色調は茶褐色を呈し、還元が及んでいないことを示している。

3　須恵器の蓋で、口径17cmである。口縁端部は屈曲しくちばし状を呈す。

4　須恵器の坏で、口径13.7cm、底径6.0cm、器高4.6cmである。体部は口縁部に向かい内湾気味に伸び、口縁端部は若干外反する。

5　須恵器の椀で、口径14.4cm、底径10.3cm、器高4.5cmである。体部は内湾気味に伸びる。

6　須恵器の椀で、口径18cm、底径12.2cm、器高5.6cmである。体部は口縁に向かい内湾気味に伸びる。高台は、体部と底部の境に直立気味につく。

7　須恵器の高坏で、坏部口径15cmである。口縁部は外反する。焼き歪みが顕著である。

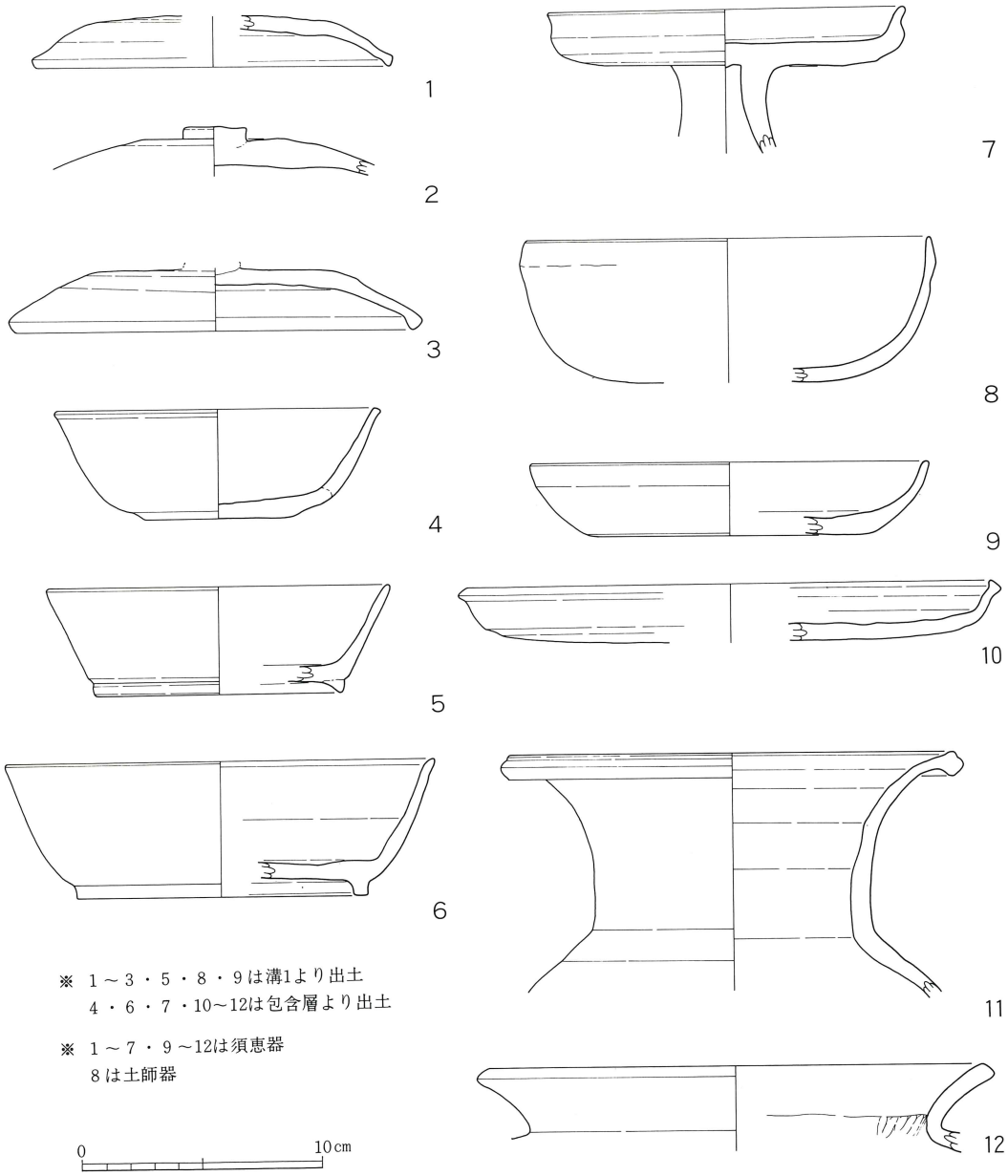
8　土師器の椀で、口径15.7cm、底径9cm、器高6cmである。体部は内湾気味に立ち上がる。

9　須恵器の皿で、口径16.7cm、底径11.2cm、器高3cmである。体部は内湾気味に伸びる。

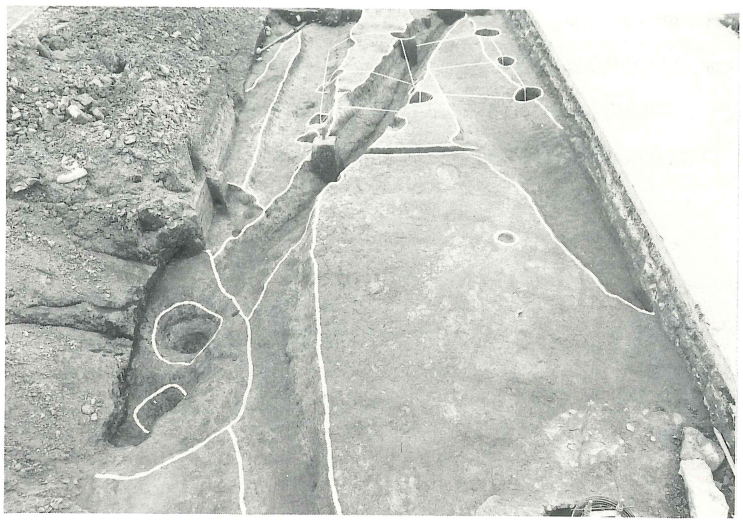
10　須恵器の盤で、口径21.9cm、底径20.5cm、器高2.4cmである。口縁端部が内側に屈曲する。

11　須恵器の壺で、胴部を欠く。口径は18.6cmである。口縁部が肥厚する。

12　須恵器の壺の口縁部で、口径20.6cmである。頸部内面にヘラ状工具による圧痕が認められる。

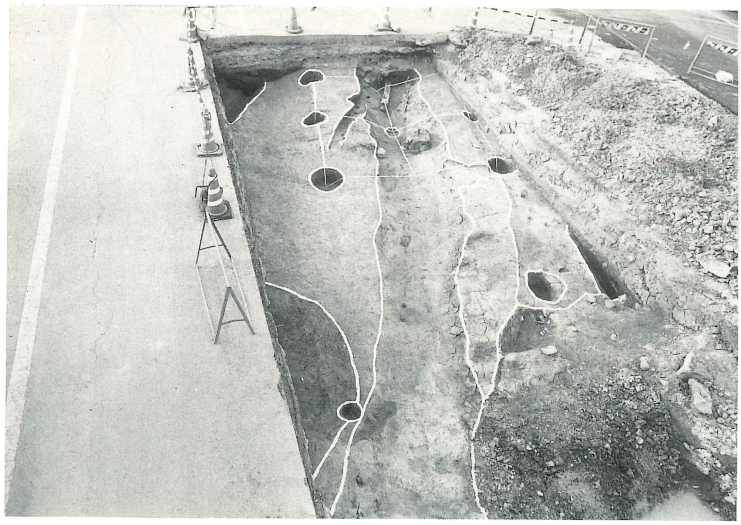


第15図　現道部分出土遺物実測図

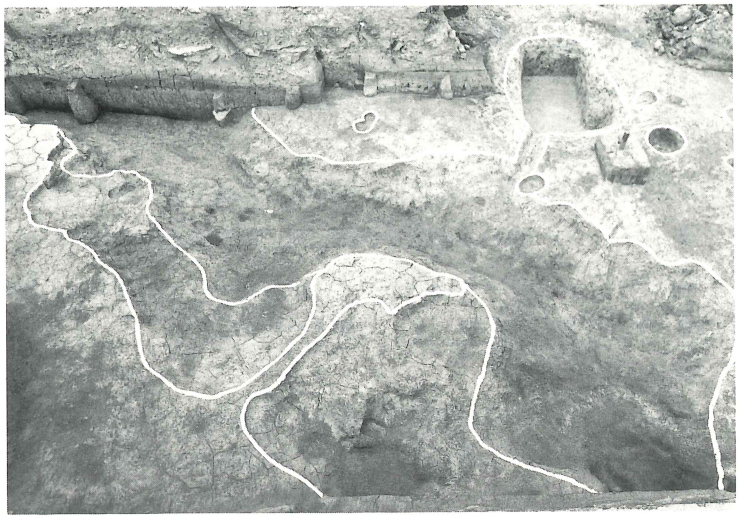


II区　全景
（西方向より）

II区　土坑４・10
（南方向より）

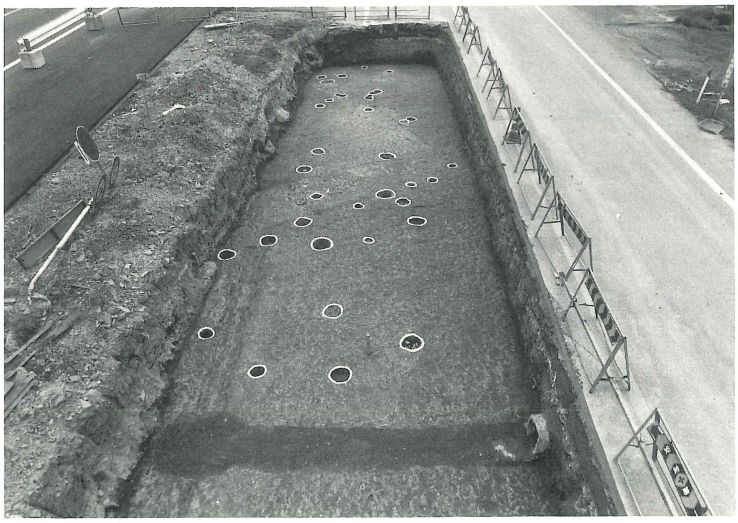


II区　全景
（東方向より）



II区　溝1
（南方向より）

II区　土坑2
（南方向より）



III区　全景
（西方向より）

Ⅲ まとめ

平成２年度における中津バイパス建設に伴う発掘調査は、向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区、現道部分について実施した。

向野遺跡兵後畑地区Ⅱ区では、溝８条、土坑９基、弥生土坑３基、土坑墓９基、掘立柱建物３棟、井戸１基、落ち込み等を検出した。また現道部分については、向野遺跡の市場Ⅰ～Ⅲ区、兵後畑地区Ⅰ・Ⅱ区の南側隣接地域一車線分について調査し、溝15条、土坑15基、掘立柱建物２棟、井戸１基、包含層、ピット群等を検出した。

溝

兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分で検出した溝の中には、兵後畑地区Ⅰ区、市場地区Ⅰ区で検出した溝と同一と見なされるものがあり、各溝の名称の混乱を避けるため今回１～６号溝にまとめて扱う（第４図参照）。このうち２号溝については前年度の調査で古墳時代に位置付けていたが、今回の調査で溝内から８世紀～９世紀の遺物が出土したため溝の時期を８世紀～９世紀に変更する。また４号溝については、兵後畑地区Ⅱ区、現道部分の両地区で溝内から８世紀～９世紀の須恵器、土師器が豊富に出土した。出土した須恵器、土師器の中には供膳具とされる盤、坏類が極めて多い点が注目される。こうした遺物の出土状況は、前年度調査の兵後畑地区Ⅰ区の部分についても同様であった。ところで２号溝と４号溝は７～８ｍの間隔で平行して延びていることが確認された。更に両溝は、現代の里道のほぼ真下を沿うようにして走っており小字の境界ともほぼ一致している。両溝が同時に機能していたかどうかは、今後更に出土遺物から検討していかねばならないが、仮にそうだとしたらこの両溝が道を挟む側溝だった可能性も想定される。前年度の概報でも触れたように現道部分の南側には古代官道が推定されている。[註2] 今回の調査でこの２・４号溝が更に南へ延びて行くことが確認され、両溝が推定官道の至近距離まで達することはほぼ間違いない。２・４号溝が道を挟む側溝だとしたら、古代官道との関係は一層密接なものとして把らえられる。なお今回の調査により兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分の南西側は地形的に低くなっていることが確認された。こうした地形的な制約等も考慮に加え、今後官道と２・４号溝との関係を検討して行く必要がある。

掘立柱建物

兵後畑地区Ⅱ区、現道部分両地区で検出した建物はいずれも出土遺物が僅少で明確な時期は不明である。各建物はその方位により、Ⅰ群（兵後畑地区の建物１、兵後畑地区Ⅰ区の建物２・３、現道部分の建物１）、Ⅱ群（兵後畑地区Ⅱ区の建物２・３）の２群に分けられる。建物と溝の切り合い関係については、Ⅰ群では兵後畑地区Ⅱ区の建物１が、２号溝を切って建てられ、現道部分の建物１が溝６・８に切られていた。Ⅱ群では兵後畑地区Ⅱ区の建物２が、１号溝に切られていた。またⅠ・Ⅱ群以外では現道部分の建物２が２号溝を切って建てられ、更に中世

の溝４(現道部分)に切られていることが確認された。したがってⅠ群の建物群及び現道部分の建物２は、２号溝或は４号溝（前述のように仮に２号溝と同時に機能していた場合）と時期を隔てて存在し、Ⅱ群の建物群は１号溝と時期を異にすることが考えられる。特に２・４号溝との関連については、Ⅱ群の建物群、或はⅠ・Ⅱ群に属さない兵後畑地区Ⅰ区の建物１、市場地区Ⅰ区の建物１との間に可能性を求めていく必要がある。

土坑墓

土坑墓は総て兵後畑地区Ⅱ区から検出された。９基の土坑墓のうち、７基は調査区中央を南東から北西へ向け、列状に配置されていた。また残る２基は、他の７基とほぼ直行する状態で検出された。土坑墓は東側の兵後畑地区Ⅰ区或は南側の現道部分では全く検出されず、したがって北西方向に更に展開して行く可能性が高い。蓋の痕跡を残す土坑墓は、３号土坑墓の１基のみで、それも土器蓋なのか石蓋なのかは不明である。他の土坑墓については、深さが３号土坑墓に比べて浅いこともあり、後世の削平による消失が考えられる。各土坑墓から人骨、副葬品は検出されなかった。遺物の出土が認められたのは２・３号土坑墓のみで、３号土坑墓出土の遺物も流れ込みである可能性が高い。２号土坑墓からは磨製石剣の切先が１点、土坑墓の床面で内側を向いた状態で出土した。磨製石剣は先端部がつぶれていた。こうした磨製石剣の切先が土坑墓から出土した例は北部九州でいくつかあるが、大半が人体へ刺突された際のショックにより折損し体内に残ったものとして把えられている。２号土坑墓における磨製石剣の切先の折損状況或は出土状況は、それらの例と相似しており同様の位置付けが可能である。

土坑（弥生時代）

兵後畑地区Ⅱ区及び現道部分から弥生時代の土坑を６基検出した。出土遺物から、兵後畑地区Ⅱ区の３基は弥生中期に、現道部分の３基は弥生後期に位置付けられる。このうち兵後畑地区Ⅱ区の３基は土坑の性格上、いずれも土坑墓群に伴う祭祀行為に関係する可能性が強いことから、「祭祀土坑」として区別した。１号祭祀土坑からは、多数の弥生土器片に混じって壺が３点、ほぼ完形に近い状態で出土した。壺はいずれも穿孔されており、近接する土坑墓群に関係する祭祀用土器であると考えられる。

現道部分の土坑３は、直径0.9ｍの円形プランで直立気味の壁面を有す。。土坑内からは甕と椀がほぼ完形に近い状態で出土した。貯蔵穴の可能性が高い。

土坑４は、直径0.9mの円形プランを呈し、二段堀りの段上に土坑を覆うようにして割られた甕が配置されていた。その形状から土器蓋土坑墓が想定されるが、規模が小さすぎる点など問題があり、今後検討を要す。

註１　「墓坑」の呼称については、宇佐市教育委員会「駅館川流域遺跡群発掘調査報告書Ⅰ」(『宇佐市文化財調査報告書』第２集 1986）に拠った。
註２　日野尚志「豊前国田河・企救・下毛・宇佐四郡における条里について」(『佐賀大学教育学部研究論集』第25集(Ⅰ) 1977)
註３　橋口達也「4．犠牲者」(『弥生文化の研究』第９巻弥生人の世界 1986)
福岡県教育委員会「福岡県鞍手郡鞍手町所在高木遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 XⅢ 1997)
鳥栖市教育委員会「安永田遺跡―柚比遺跡群範囲確認調査第３年次調査報告書―」(『鳥栖市文化財調査報告書第16集』1983)　他

一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報

向野遺跡Ⅱ

1991・3・31

発行　大分県教育委員会

印刷　東洋印刷有限会社